

令和 5年度 福井県立福井東特別支援学校 学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
1 教育課程・学習指導 研究・研修	<p>【重複部】 身近な人や地域との主体的なつながりとおして、「生きる力」をはぐくむ授業づくりに取り組む。</p> <p>目標：身近な人や地域の人と主体的に関わることができる、児童生徒ひとりひとりの目標にあった授業づくりを実践する。</p> <p>目標指数70%</p>	<p>重複部教員のほとんどが、児童生徒の実態にあった目標を設定し、身近な人や地域の人と主体的に関わろうとする授業を検討し実施できたと回答している。そのうち38%の教員は、さらに、児童生徒が主体的に関わることができる機会や対象を広げたり、関わりを深めたりすることができたと回答している。その背景には、小学部で、児童の身近な教師への発信を丁寧に拾い、それを返しながら関わりを深めてきた実践の積み重ね、中高等部でのつながる活動で、他学部の教師や特せの先生方、地域の幼稚園などにレンタル植物を届ける活動を通して生徒と教師との深い関わりを外部に伝えられた成果があげられる。外部講師を招き、VTRを活用した授業研究会を今年も5回実施し、常に児童生徒との関わり方、授業の展開の仕方などを検討してきたことも大きい。</p> <p>その結果、教員の支援により、学校生活の中で児童生徒が身近な人や地域の人に自分から関わったり、関わりを深めたりする姿が見られるようになったと考えられる。</p> <p>また、保護者からは、子供が身近な人や地域の人と主体的に関われるよう工夫をしていると全員が考えている。十分工夫していると考える保護者が88%と高いことを見ても、理解を得て満足してもらっていると考えられる。</p>	<p>児童生徒が主体的に関わろうとする授業作りについては、これまでの研究をきっかけに、教員も意識して実践してきたためこれからも継続していく。つながる活動などによる関わりを広がりも同様に継続していく。</p> <p>更に、児童生徒の実態に基づいた目標を設定し、内容を精選した授業作りを今まで以上に行えるよう、次年度は、課題関連図(ひとりひとりの児童生徒がもつ課題の関連性を明らかにするためのもの)を作成し、活用していきたい。</p> <p>そのために次年度も外部講師を招き、助言を得ながら、事例研究を進めていく。</p> <p>保護者に対しても、学期ごとの懇談会や授業参観などを利用して学校での取り組みを知らせる機会をもつようにする。</p>
	<p>【病肢小中学部】 児童生徒の自己実現に向けて、多様な支援を探り、体験を取り入れながら、成長を実感できる授業づくりに取り組む。</p> <p>目標：関係機関との連携や一人一人の特性と課題に応じた指導計画の作成及び授業づくりに取り組む。</p> <p>目標指数70%</p>	<p>教員は、児童生徒の実態や教育的ニーズ、課題を学部で共有し、複数の視点で授業づくりに取り組んだ。3回の授業研究会には外部講師を招いて助言を得た。91%の教員が、児童生徒の自己実現に向けた授業に取り組む、学部で授業研究会を「3回以上行った」と回答した。学部で授業研究会を「2回行った」と回答した教員を合わせると100%になり、目標指数の70%以上を達成することができた。</p> <p>児童生徒の自己実現に向けた授業を行うことにより、児童生徒の人との関わりや、地域・社会とのつながりに「とても」または「少し」変化が見られたと全ての教員が回答した。児童生徒の興味あるものや「やってみよう」という思い、共に活動し対話をする体験を授業に取り入れたことで、人との関わりや活動、学びの場が広がったと実感している。児童生徒と周囲の人が影響し合い、新たな行動や主体的な学びにつながったのではないかとと思われる。</p> <p>また、全ての保護者は、児童生徒が個々の願いを実現できるような学習を、よく学習していると感じた」と回答し、高評価を得た。</p>	<p>児童生徒の心身の状態や学習状況等をこまめに把握し、教育的ニーズや課題に応じた指導計画の見直しや授業の検討を複数の教員で行っていく必要がある。年間計画以外でも必要に応じて関係機関や外部専門家の助言を得ながら、支援検討会や授業研究会を継続して行う。</p> <p>次年度も、児童生徒が安心できる環境を整え、学校や地域の中で主体的に学んでいけるようにするための授業づくりに学部全体で取り組んでいく。児童生徒の日々の学びと地域での生活や将来とのつながりを意識しながら、共に活動し対話をする体験を取り入れたり、他学部と連携した活動を展開したりする授業を行っていきたい。</p>
	<p>【病肢高等部】 多様な生徒一人一人が卒業後の「なりたい自分」を目指して、主体的に学べる授業づくりに取り組む。</p> <p>取組目標： 関係機関や外部専門家と交えた支援検討会や授業研究会の内容をもとに、生徒が主体的に学べる授業づくりに取り組む。</p> <p>目標指数70%以上</p>	<p>関係機関や外部専門家と交えた支援検討会や授業研究会の内容をもとに、69%の教員が授業を2回以上、12.5%の教員が授業を1回実践し、目標指数の70%以上を達成することができた。学部研究のテーマである『「キャリア教育」になりたい自分になる ～確かな支援～』に沿って、生徒それぞれの実態を学年団で話し合い共有しながら、今年度も進路指導目標とそれを実践するための「夢かなタイム」の授業づくりに力を入れてきた。また、「夢かなタイム」以外の自立活動の授業内容についても学年団や担当者で検討を行い、実践してきた。</p> <p>その結果、日々の授業や活動での取り組みの中で、生徒の主体的に学ぶ姿にとっても変化が見られたと感じた教員が27%、少し変化が見られたと感じた教員が70%と、ほぼ全ての教員が生徒の学ぶ姿に変化を感じ取っている。気がかりなことがあれば保護者や医療、福祉と連携を取り、支援の方法を関係者で話し合ってきたことも生徒の変容につながったと考える。</p> <p>また、96%の保護者が、学校が将来につながるような授業や活動(校外学習、現場実習、学校祭、修学旅行、交流学习など)に、十分またはおおむね取り組んでいると回答し、目標指数の70%以上を達成することができた。</p>	<p>来年度も年3回のチェックリストを継続し、生徒の実態把握や変容の確認を行い、今年度同様、多様な生徒一人一人に合わせた具体的な進路指導目標の設定→実践→振り返り→目標・内容の再検討を繰り返し進め、より生徒が主体的に学ぶことのできる授業づくりに取り組む。</p> <p>また、関係機関や外部専門家と交えた支援検討会等を開き、様々な視点から生徒理解に努める。そして、助言等や教員間で話し合ったことを活かし、授業や活動内容の改善・工夫を授業担当者や学年教員で行うようにする。</p>

<p>【五領・月見分教室】 教育的ニーズを共有して、個に応じた授業づくりに取り組む。</p> <p>目標： 児童生徒の状況について情報を共有し、授業の進め方について週1回以上話し合う。</p> <p>目標指数70%</p>	<p>五領分教室では、日々の職員連絡会や月1回の病院学校連絡会を通して、児童生徒の学習状況や病状について情報共有し、授業に生かすことができた。事例検討会では、児童生徒の状態や今後の治療計画などについて共通理解を図り、より効果的な指導や授業改善につなげた。また、前籍校の遠隔授業を希望する児童生徒には、リモートによる授業参加を支援した。精神科の児童生徒においては、入院カンファレンスを行い、本人の状況の把握や学習の進め方について共通理解を図った。</p> <p>月見分教室では、本人・保護者・前籍校の担任等から寄せられたニーズを基に、学習指導や自立活動に取り組んだ。児童生徒の相性を考慮しつつ、異学年合同の活動にも取り組み、児童生徒同士のやりとりを増やすことができた。関係教員とは、児童生徒の学習状況や病状、学習の様子について、スクールウェアや共有ファイルを利用して情報共有を図った。</p> <p>その結果、五領・月見分教室の保護者全員から、教員が保護者や本人の要望を把握し児童生徒の心身の状態やニーズに合わせた授業を行っている、と高評価を得た。</p>	<p>五領分教室では、今後も医療従事者、前籍校と情報を共有しながら、児童生徒の現状を把握し、本人保護者のニーズや様々な教育課程に対応し、これまで以上に教材教具の工夫などの研修を行う。具体的には、転入前の学校見学时に保護者や本人からの聞き取りを丁寧に行い、教育支援の必要性や課題を適宜把握し、授業実践に生かしていく。また、一層の支援の充実のために、小児科だけではなく関係診療科及びリハビリ科等とも連携を図り、多機関・多職種での総合的な支援を目指す。</p> <p>さらに、退院時の不安を少しでも軽減できるように、遠隔による前籍校の授業参加の方法や時期、内容、頻度なども考慮して適切な支援を行う。</p> <p>月見分教室では、今後も小児科病棟だけでなく、カウンセラーや児童生徒が受診する他科との連携を行っていく。関係機関や前籍校とこまめに情報交換を行い、支援体制の充実を図り、退院後の移行支援につなげる。</p>
<p>【図書研究部】 つながりを通した主体的な学びの実現を図って、小中高の枠を超えたより複数の教員が授業を省察し改善に生かす研究会を実施する。</p> <p>目標： 児童生徒の視点で学びの状況を読み取り、複数の教員と授業や支援の工夫について話し合いを行う。</p>	<p>92%の教員が、児童生徒の学びの状況を見取り、複数の教員と授業や支援の工夫について話し合いを年2回以上行ったと回答した。また、93%の教員が、複数の教員で児童生徒の学びの状況や学びを深めるための授業や支援を共有し、十分にまたはおおむね改善につなげたと回答した。これは、研究会や授業参観期間を計画的に実施し、児童生徒の視点で学びを観察したり、ビデオを活用して振り返ったりして、複数の教員で授業研究や事例検討に取り組んだことで、授業の改善につなげることができたと考える。しかし、約7%の教員が授業改善にあまりつながらなかったと回答しており、今後とも質の高い授業改善を行えるような研究会を企画運営していきたい。</p> <p>97%の保護者が保護者会や授業参観、おたより等を通して、学校が児童生徒の学びの過程に寄り添う日々の授業や支援に十分またはおおむね取り組んでいると回答し、高評価を得た。</p>	<p>今後も児童生徒の主体的・対話的で深い学びを目指しつつ、来年度からは児童生徒一人一人の可能性を引き出すための「自立活動」における指導の充実を目指し、質の高い授業改善に取り組んでいきたい。そのためには、障がい別研究会・全体研究会や授業参観期間を計画的に実施し、複数の教員同士で省察する授業研究や事例検討に取り組めるように、実践などを取り入れた研究会の企画運営をしていきたい。また、学習指導案作成の取組も継続する。</p> <p>保護者に対しては、今後も学期ごとの保護者懇談会や授業参観、連絡帳等を通して学校での取組や児童生徒の学びについて理解を得られるように伝えていく。</p>
<p>【教務部】 学校間交流、居住地校交流、地域との交流等に取り組む。</p> <p>目標： 学校間・居住地・前籍校交流及び校外学習や作品展、事業所への実習等の地域交流を通して、校外の人と関わったり、児童生徒への理解を促したりする機会を持つ。</p>	<p>新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことで、昨年度よりも「直接対面での」学校間、居住地校、前籍校との交流学习、販売会、校外学習などを積極的に行い、回数を重ね、児童生徒の自己有用感や社会や人とのつながりを促すことができた。さらに、美術科企画による玄関前エントランスや事業所での作品展、高文祭への参加なども、校外の人への本校児童生徒の理解を促した。</p> <p>これらの取組に対し、4%の教員がこの取組による児童生徒の変化が見られなかったとしている。これは、児童生徒がその活動に参加できなかったことや、活動内容が一人一人の児童生徒のねらいに適していなかったことが考えられる。</p> <p>また、PTA総会の際に3年ぶりに「交流報告会」を15分程度、令和4年度の全学部で学校間交流と居住地校交流、前籍校交流を紹介した。令和5年度の交流(学校間、居住地校、地域交流)の様子は、活動の事後に校内掲示やPTA新聞、連絡帳や懇談会等で伝えた。そのため、95%の保護者は校外の人と関わる活動に「十分」または「おおむね」取り組んでいると感じていた。しかし、5%の保護者は、学校は「少し」校外の人と関わる活動に取り組んでいると回答したしている。これは、計画された校外の人と関わる活動に児童生徒(御自身のお子さん)が参加できなかったためと思われる。</p>	<p>より一人一人の児童生徒のねらいを見極め、そのねらいに適した内容の学校間交流、居住地校交流、地域との交流等を感染症対策を十分に行って、できるだけ、直接対面での交流に務める。</p> <p>前年度の活動を紹介する「交流報告会」は行わず、代わりに学校間交流・居住地校交流の様子を紹介した校内掲示をHPで紹介したり、今年度に引き続き連絡帳や学期ごとの懇談会等で、保護者に児童生徒の様子を詳細に伝えたりする。</p>
<p>2 家庭・地域との連携 進路指導</p> <p>【進路指導部】 保護者と進路についての懇談を定期的に設ける。生徒の進路意識を高める授業を年間2回以上行う。</p> <p>目標： 保護者・児童生徒が早い段階から進路について考える機会を持つようにする。</p>	<p>保護者と定期的に進路についての懇談を行った教員は88%で、目標指数の90%には若干届かなかったが、生徒の進路意識を高める授業や仕事に関する授業を年間2回以上行った教員は90%と、目標指数を達成できた。今後は保護者の進路意識がさらに高まるような工夫をしていきたい。</p> <p>進路に関する情報提供や授業を通して、進路に対する意識が高まったり、考える機会を持ったりした生徒は88%と、目標指数の80%は超えることができた。進路に関する行事や病肢高等部の「夢かなタイム」の成果が出てきたように思われる。今後は、生徒全員の進路意識を高める取り組みをしていきたい。</p> <p>進路について考える機会が増えた保護者は96%と、目標指数の90%を大きく超えた。教員の懇談会・進路研修会の保護者参加・新しい取り組みの「事業所さんといっしょ」などの成果と、保護者の意識の高さの現れだと思われる。</p>	<p>進路指導に関しては、中学部、高等部1年生の早い時期から自分の将来を考える機会を授業を通して増やしていきたい。特に、病肢高等部では、「夢かなタイム」の授業が3年目となるので、生徒の実態に合わせて、有効活用できる内容を検討していきたい。また、今年度から始めた「事業所さんといっしょ」では、保護者にとって有効ではあったが、参加人数が少なかったため、参加者を増やす努力・工夫を重ね、来年度も実施していきたい。</p>

	<p>【庶務部】 親睦会や各事業の企画運営に取り組み、保護者の親睦を図る。</p> <p>目標: 保護者が楽しく気軽に学べたり、児童生徒の活動への理解を促したりする機会をもつ。</p>	<p>取組指標は、Aが100%だった。庶務部員は保護者に対して、年2回以上、PTA事業を通して楽しく気軽に学べたり児童生徒の活動への理解を促したりすることができたと回答した。</p> <p>成果指標は、AとBの合計が100%であった。全ての保護者が、PTA親睦会や事業所見学、PTA新聞発行などのPTA事業を経て、児童生徒の学校生活の様子が分かったと回答し、高評価を得た。</p> <p>満足度指標は、AとBの合計が60%であった。60%の保護者は、PTA事業を通して保護者同士のつながりを促進することができたと回答している。34%の保護者は促進できなかったと回答し、6%の保護者は無回答だった。</p> <p>満足度指標での促進できなかった課題として、PTA事業の「夏祭り」や「講演会」、「家族で楽しもう会」では、同級生同士や家族の絆は深められたものの、保護者同士の交流は図られなかったことが考えられる。また、参加すること自体が難しかったことも考えられる。</p>	<p>保護者が楽しく気軽に学んだり、保護者同士のつながりを深めたりできるように、行事の内容や実施方法を工夫したり、開催時期や時間帯をよく検討したりする。特に、次年度は5年ぶりの開催となる学校祭PTAバザーや昼食(給食試食会)をはさんだ午前の部と午後の部のPTA行事を予定している。三役の保護者を中心に保護者の意見をよく聴いてPTA行事を企画し、保護者全員の協力を得ながら運営する。</p> <p>年2回発行するPTA新聞では、保護者に写真を通して児童生徒の学校生活の様子を知らせるように工夫する。</p>
<p>3 安心・安全</p>	<p>【保健部】 児童生徒の健康管理や安全に対する意識を高め、より安全な生活を送ることができる環境を整える。</p> <p>目標: 児童生徒の体調把握や搬送訓練、避難訓練、救命救急法講習等の実施を通して、安心・安全に対する意識向上を働き掛ける。</p>	<p>コロナ5類移行後も、児童生徒が安心して学校生活を送れるように、感染状況や活動内容に応じて感染症対策を続けた結果、学校内で感染症の流行は見られなかった。管理職や保健部員が中心となって、保護者や教職員へ感染症対策を働き掛けたり情報を知らせたりしたことが意識向上につながり、それぞれが適切な行動をとった結果だと思われる。また、安全については、校内の全ての箇所ですべて毎月安全点検を実施して、安全な環境づくりに取り組んだ。防災については、校内または併設されている他機関との合同避難訓練を実施することで、学校全体の体制について成果や課題を明確化することも、各学部内での応援態勢など細かな点についても話し合うことができた。</p> <p>学校の『安心・安全に対する取り組み』について、保護者は79%が「十分に取り組んでいると感じた」と回答しており、8割近い保護者が満足したという結果だった。病弱・肢体不自由児の支援学校として、これからも健康管理や安全に対する取り組みを引き続き丁寧に行っていく。</p>	<p>感染症や熱中症等の注意報に対して、保健部員が情報を発信し、学校全体で必要な対策を実施する。また各クラスでは日々の丁寧な健康観察を継続することで、児童生徒の健康管理に努める。保護者へは、健康に関する情報を提供したり協力を依頼したりする。</p> <p>災害に対する取り組みについては、児童生徒・教職員全員対象の緊急時対応訓練を計画し、一人一人が考えて行動することを意識付けたい。保護者に対しては、緊急時引き渡しカードの作成や確認、緊急メールの訓練を通して、災害時の学校との確認する。また、本校が福祉避難所となった場合の役割についても考えていく。</p> <p>児童生徒が緊急時の場面を想定して、各学部またはクラスでの訓練を通し、役割分担の確認やマニュアル作成などを呼びかけ、緊急時の体制を強化する。</p>
<p>4 生徒指導</p>	<p>【指導部】 児童生徒一人一人に応じた学校行事への積極的な参加を促し、主体的に活動するための内容を充実させる。</p> <p>目標: 児童生徒一人一人が主体的に学校行事に取り組むための支援の工夫や改善に取り組む。</p>	<p>今年度も、学校祭の応援合戦はVTR上映とし、児童生徒一人ひとりが無理なく出演することができた。出演に抵抗がある児童生徒は、動画の撮影や編集という形で動画作成に携わった。改善点として、学校祭をコロナ前の状態に少しずつ戻すことを意識し、保護者は今年度、子ども広場にも参加できるようにした。また、今年度は、子ども広場の時間・場所の指定を解除した。重複部の児童生徒たちが保護者と笑顔で店をまわる楽しそうな表情が多く見られた。また、病肢部の生徒が店の当番を行い、客と金銭やチケットのやり取りを意欲的に行う姿も見られた。準備期間も含め、児童生徒それぞれが心身の負担を軽減し、楽しく主体的に活動していた。</p> <p>実行委員会には休みがちな生徒や集団活動が苦手な生徒もいるが、スポーツ大会(ユニカール)、スポーツ交流祭(ポッチャ)の企画・運営では、それぞれの参加に適した方法で役割を分担し、見通しを持って活動に取り組んだ。病肢部の児童生徒が重複部の児童生徒に声援を送ったり、競技の介助をしたりするなど、主体的に関わる姿が見られた。</p> <p>学校行事において、96%の教員が児童生徒一人一人に応じた活動に取り組めるように支援を工夫したと回答した。96%の教員が児童生徒が学校行事に参加し、それぞれに適した方法で主体的に取り組む姿が見られたと回答。また97%の保護者が児童生徒が学校行事において達成感や充実感を味わえるように学校が活動に取り組んでいると感じたとの評価を得た。</p>	<p>学校祭については、新型コロナウイルス2類以前の状態に少しずつ戻していく方向で検討していく。具体的には、PTAバザーや子ども広場の飲食店の再開、保護者や来賓、卒業者の参加方法などについても検討していく。</p> <p>様々な行事や委員会活動を計画するにあたり、個別対応が必要であったり、集団活動に入れなかったりする児童生徒が増えていることから、どの児童生徒にも取り組みやすく、参加しやすい活動内容を検討していく。</p>
<p>5 教育支援</p>	<p>【教育支援部】 復学支援や校内のケース会議を通して校内支援体制を整備し、校内外の教育相談につなげる。</p> <p>目標: 校内のケースをモデルとして、医療・福祉も含めた校内支援体制を整理する。</p>	<p>今年度は、教育支援部員が本校の児童生徒のケース会議や転出入に関する面談に可能な限り参加し、そのケース会議等によどのような役割で出たのかということを確認することで、教育支援部の校内での役割を明確にした。部員全員が1回以上校内ケース会議に参加し、延べ28回のケース会議に参加し、特に病肢小中学部での教育支援部の役割について整理できた。また、高等部の入学選考に向けての教務部との業務のすみわけがはっきりした。</p> <p>教育相談だよりは2回発行できた。特に2回目に発行した本校での研修や高校通級での取組をまとめた自己理解を進める上でのかわり方についての内容は、校外からも好評であった。</p> <p>校内外での相談については、相談した事案において相談することで支援方法を見出すことができた、おおむねできたが合わせて91%あった。校外からは専門的な立場で丁寧に支援方法を教えていただき有り難かった、保護者は安心したなどの声をいただいた。</p>	<p>今年明確になった役割分担に沿って取り組んでいく。本校のこれまでの歴史の中で、その流れを明記したものがいくつかあるので、統一できることはするなどして表記できるものにしていく。</p> <p>教育相談だよりは、限られた部員で作ったので、次年度はより多くの部員がかかわり、本校の取り組みも生かしながら作っていきけるようにする。</p> <p>今年度は、役割分担など外側の部分の整理で終わったが、次年度は校内外のケース会議の中身について支援部で事例検討したりしていきけるようにと考える。月1回程度の事例検討を通して、教育支援部員のスキルアップをはかっていきたい。</p>